

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

7

Vol.45 No.7 JULY

2022

臨床場面における 倫理的なモヤモヤを 考える



連載

脳性麻痺の子どものリハビリテーション
脳性麻痺治療における
整形外科的手術の役割

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる♪

佐藤聰美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第14回 電池とドライバー

「なんでだよ。どうして動かないんだよ」

息子の目から大粒の涙がこぼれた。人生で初めて自分で買った、青いプラレールが動かないのだ。

子どももフリーマーケット。親は囲いの外に出され、子ども店長と子ども客が現金で買い物をする。時間は15分。わが子はスタートと同時に、真剣におもちゃを吟味している。女の子の「いらっしゃいませ」が高らかに響く。年上の女の子たちが、息子の持っていない青いプラレールを見せびらかしていた。彼はすぐさま「これ、いくらですか」と大声で聞いている。ポニーテールの女の子に「100円です」と言われ、黄色い財布から硬貨を探して渡した。

次は、男の子の店へ向かう。ここでもプラレールを探す。息子と同じ背格好の店長が緊張のあまり、値段を聞いても何も答えてくれない。そこで息子は緑のプラレールをつかんで、とりあえず100円玉を差し出した。店長は黙って50円のお釣りをくれた。興味深い、無言の売買である。

そうこうしているうちに、フリーマーケットも終了。息子は非常にうれしそうに戻ってきた。「買い物は楽しかった。早く家に帰って電池を入れて遊びたい」と頬を紅潮させていた。

いよいよ息子がプラレールに電池を入れると、一向に動かないという、先ほどの顛末である。彼は深く傷ついた。女の子はプラレールが壊れているのを知らなかったのか、知っていて売ったのか、真相はわからぬ。どの程度、親の関与があったのかもわからない。

いずれにせよ、一度きりの出会いのため、売り逃げ可能である。

作家のスティーブン・キングは「最初の嘘は、だましたほうが悪い。二番目の嘘は、だまされたほうが悪い。三番目の嘘は、だますほうも、だまされるほうも悪い」と記していた。キングは子どものころ、医師に「痛くないよ」と言われ、耳に刺された針が激痛である経験をした。何度も繰り返しても痛かったことから、7歳のときにそういう信念が作られたのだという。

ある女の子は、小児がんの治療の後に「お母さんも先生も何も言わないけど、髪の毛も生えていないのに、本当に小学校の友だちは何も言わないかなって心配だったよ」と話してくれた。小学校にも入れば、子どもたちは大人の前で純真無垢に振る舞うことぐらい造作もない。そして、大人の見ていらないところで、異質な子どもに対する意地悪や悪意は増殖する。だからこそ、大人が先手を打って、復学する子どもをクラス全員で応援する意思を表明しなければならない。

翌朝、わが子は「今度、お店が来たら、ママはドライバーと電池を持って待っていて。俺がプラレールを見つけたら渡すから、電池を入れて動くか確かめて。動いたら買うから」と場外連携を提案してきた。企業買収も顔負けの自己防衛である。そこまでして必死にプラレールを手に入れたい子どもに比べれば、可愛い、可愛い、と写真を撮っている大人はのんきなものである。

佐藤聰美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国の Bellevue Community College を卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。